

教えの道は多かれど

会期 二〇二三年十月二日～十二月二十一日
―掛軸から見た大妻の教育―

解説資料

はじめに

大妻女子大学博物館では、大妻学院に伝わった掛軸を約一〇〇点所蔵している。その中から今回、明治～昭和時代に作成された十一点を展示する。展示している掛軸は、三つに分類することができる。

第一は、大妻教育の根本に関わる掛軸である。学院創立者の大妻コタカ・良馬夫妻が揮毫した掛軸からは、大妻教育の根本となった二人の思想を読み取ることができる（展示番号2・3）。また大妻の校訓「恥を知れ」は、良馬が幼少時に受けた教えを、校訓として制定したものである（展示番号1）。

第二は、明治天皇と、その皇后である昭憲皇太后が作った歌である（展示番号4・5）。二人が作った和歌は、戦前の教科書に掲載され、教育に用いられていたが、戦前の大妻学校（大妻技芸学校・私立大妻高等女学校等）においては、皇太后作詞の唱歌が朝礼で歌われていた。この二点は、大妻教育と皇室との関わりを示す資料である。

第三は、大妻で教えられていた教育的標語に関わるもの（展示番号6～10）と、旧校歌である（展示番号11）。四字の標語は講堂に掲示され、多くの学生・生徒たちの目に触れていたものと思われる。また旧校歌では、「恥を知れ」という言葉を忘れなければ、あまた存在する教えの道で迷うことはない、と歌われている。大妻教育における校訓の重要性が分かる。なお、本特集展の名称「教えの道は多かれど」は、旧校歌の一節である。大妻の教えは、校訓、標語、そして歌詞として

掛軸に文字化されていた。学生・生徒たちは、その掛軸を見て、読んで、そしてそれを聞いて、大妻の教えを体得していったものと思われる。掛軸に記された言葉の一つ一つが、年若く迷いがちな大妻の学生・生徒たちを導くためのものだったのである。

※本特集展は、大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（課題番号K二二〇二「大妻女子大学博物館所蔵掛軸の調査と研究」・K二二〇二「大妻女子大学博物館所蔵掛軸の調査と研究（2）」）を受けて開催します。

1 鳩山一郎書

昭和七年（一九三二）十月
大妻女子大学博物館蔵

縦一九七・八 横五二・四 cm

本紙縦一〇七・四 横三三・五 cm

鳩山一郎（大正〳昭和時代の政治家、号・楽山）が大妻コタカに宛てて揮毫した書。

大正六年（一九一七）に制定された大妻の校訓「恥を知れ」を揮毫している。鳩山は、昭和七年当時文部大臣を勤めていた。その関係から、コタカが鳩山に、揮毫を依頼したものと推測される。

右上の落款は「思無^{おもいよこしま}邪^{なし}」（私心なく、公平である。思うことをそのまま言い表わして偽ったり飾ったりしない）。

【文面】

恥を知れ

大妻女史 囑 一郎

【落款】



「思無邪」

「鳩山一郎」

「楽山」

2 大妻コタカ書

昭和四十年（一九六五）頃
大妻女子大学博物館蔵

縦一九二・四 横四九・五 cm

本紙縦一二五・五 横三三・五 cm

大妻学院創立者である大妻コタカが、六〇年以上にわたる教育者としての人生を経て、八十一歳の時に記した書。コタカは「良き妻、賢き母」を教育方針とし、家庭生活の充実を重要視してきたが、この掛軸においても家庭の円満を説いている。掛軸右上には落款「和楽」（なごやかに楽しむこと、互いにうちとけて楽しむこと）が捺されており、人の和を重視するコタカの思いがかいま見える。

【文面】

よき家庭は
仲 うつくしきかな

八十一才 大妻コタカ書

【落款】



「和楽」

「大妻コタカ」

3 大妻良馬和歌

昭和初期
大妻女子大学博物館蔵

縦二二二・六 横四七・六 cm

本紙縦一三四・〇 横三三・九 cm

一心は大妻良馬の号。この和歌は、私立大妻技芸伝習所設立から十周年となる昭和元年（一九二六）十月、良馬（当時五十五才）が楽焼に書きつけたものであるという。

良馬は、「我^{わが}国民道徳はこの知恩と謝恩を以て其^{その}真髓^{しんずい}とする」（『吾等の信念』一九二六年）と述べるなど、受けた恩に報いることを重視しており、その思想がこの和歌からも読み取れる。

【文面】

我^{おもい}か 思^もし 遂^とけすして 果てな
んか／尊き恵に いかて答へむ 一心

【現代語訳】

私の思いがもしも遂げられずに果てて（死んで）しまおうだろうか。／（そのような時は、私が受けてきた）尊い恵にどのように答えようか。一心

昭憲皇太后御歌

明治〜大正時代

大妻女子大学博物館蔵

縦二二九・二 横九〇・二 cm

本紙縦一三三・三 横六四・二 cm

昭憲皇太后（明治天皇の皇后）が作詞した唱歌の歌詞を掛軸としたもの。「金剛石・水は器」とも呼ばれる。昭憲皇太后は女子教育において模範とされており、地久節（皇后誕生日、明治時代は五月二十八日）の日、各女学校ではこの歌を奉唱した。大妻学校では、大正十一年（一九二二）頃から昭和二十年（一九四五）まで、朝礼の際にこの歌を歌っていた。この時、この掛軸が使用されていた可能性がある。

【文面】

金剛石もみかすは 玉の光はそはさらむ
 人も／まなひてのちにこそ まことの徳は
 あらはるれ 時計の／はりのたえまなく
 めぐるか如く時のまの 日かけをしみて
 励みなは いかなる 業 か成らさらむ

水は器にしたかひて そのさまさまになりぬな
 り 人は／ましはる友により 善きにあしき
 に移るなり おのれに／まさるよきともを
 えらひ求めてもろともに 心のこまに／むち
 うちて 学ひの道にすゝめかし

5 明治天皇御製

明治〜大正時代

大妻女子大学博物館蔵

縦二二三・六 横五八・一 cm

本紙縦一五一・八 横四〇・一 cm

明治天皇の御製（天皇が作った和歌）の文言を掛軸に仕立てた物。明治天皇は和歌を好み、生涯約十萬首の歌を残した。大妻学院には、明治天皇の御製を掛軸に仕立てた物が二十点伝来しており、昭憲皇太后御歌（展示番号4）と同様、学院の教育に使用されていたと推測される。

この和歌では、身分や地位が異なっているも、人は皆、誠の道を守るべきことを詠んでいる。

【文面】

ひとハたゝまことのみちを
 まもらなむ たかきいやしき
 しなはありとも

【現代語訳】

人は、何はともあれ誠の道を守ろう。
 身分や地位の高い低いがあつたとしても。

6 生徒訓練の方針

大正十一年（一九二二）

土屋久代 書

大妻女子大学博物館蔵

縦二一九・三 横八九・五 cm

本紙縦一三三・二 横六三・六 cm

大正時代の大妻学校における指導方針を記したもの。校訓「恥を知れ」が、大妻家の家訓に由来することが記される。そして、これを最も大切な考えとして、次に「貞淑温雅」・「公明正大」・「質実勇健」・「機敏快活」などの徳の養成が掲げられている。これらの文言は、独立した掛軸に仕立てられており（展示番号7〜10）、短い標語として学生・生徒たちに指導されていたと考えられる。

【文面】

生徒訓練の方針

本校は、大妻家に於ける父祖の家訓、恥を知れを以て修徳上の第一義となし、至誠を以て自己の本分を尽し、公明正大にして和衷協同、質実勇健、沈着にして機敏快活、貞淑温雅の徳を養成せむことを期すべし

7 四字書「貞淑温雅」

大正時代

大妻女子大学博物館蔵

縦二三八・四 横六三・七 cm

本紙縦一八一・六横四四・九cm
 「貞淑」は女性の操みさおがかたく、しとやかなこと。「温雅」は穏やかで上品なことを意味する。

この掛軸は、昭和四年（一九二九）の講堂内を写した写真の中で確認することができる。このことから、「貞淑温雅」の掛軸は、昭和初期、講堂内に掲示され、多くの学生・生徒たちの目に触れるような環境で使用されていたことがわかる。



昭和四年（一九二九）講堂写真
 （大妻女子大学博物館蔵）



赤枠部分拡大

8 四字書「公明正大」こうめいせいだい

大正時代

大妻女子大学博物館蔵

縦二三七・八横六四・三cm

本紙縦一八一・二横四五・〇cm

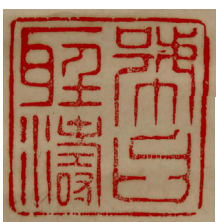
四字の標語が大書たいしよされたものとしては、「貞淑温雅」以外に、「公明正大」・「質実勇健」・「機敏快活」（展示番号8〜10）がある。この四点の落款は同一であることから、表同一人物によって揮毫されたものと考えられる（印文は「寺浦堂印」・「号日聖濤」と読めるが、詳細は不明）。よって、「貞淑温雅」と同様、他三点の掛軸も、講堂等で使用されていたと考えられる。

【落款】

7 四字書「貞淑温雅」



8 四字書「公明正大」



9 四字書「質実勇健」



10 四字書「機敏快活」



9 四字書「質実勇健」

大正時代

大妻女子大学博物館蔵

縦二三七・五 横六四・五 cm

本紙縦一八一・〇 横四四・三 cm

「質実勇健（剛健）」とは、質素で誠実、力強くたくましいことを意味する。男子校でよく見られるこの標語が、女子学校である大妻において呼びかけられているのが特徴的である。

実際、大妻技芸学校では、体力作りのため、学校を出発点に石神井公園（現・東京都杉並区）まで七里（約二十七km）の遠足を行っていたという。

11 大妻学校校歌

大正時代

大妻女子大学博物館蔵

縦二一八・八 横九〇・三 cm

本紙縦一三三・二 横六四・〇 cm

大正六年（一九一七）に制定された旧校歌の歌詞（現校歌は一九五三年制定）。大正十一年頃から昭和二十年（一九四五）まで、朝礼時に「昭憲皇太后御歌」（展示番号4）とともに歌われていた。二番の歌詞では、校訓「恥を知れ」を忘れなければ、教えの道で迷うことはない、とある。大妻で勉学に励む上で、校訓は最も重要な教えであり、大妻の学生・生徒が迷わないための道しるべであった。

【文面】

校歌

一 山階・華頂ふた宮の たまへる校舎・校門
（注） 朝（あしたゆうご） 夕（ゆふ）の
（出で）い（い）て入りに あふくもいと（畏し）かしこしや
二 教の道ハおほかれと 恥（恥をば知れ）をはしれの（言）ことの
葉を 常に心に（道）

忘れすは いかてか迷ふミちあらむ（限り）

三 学ひの山の奥までも 力（ちから）のかきりわけ入り

て こたへまつらむ思ふと ちたくひもあ（類い）

らぬミめぐみに（みめぐみ）

【注】当時、山階（やましなのみや）宮（みや）家より拝領の建築古材で校舎を建て、また華頂（かちやうのみや）宮（みや）家より通用門を下賜されていた（ともに一九二三年の関東大震災で焼失）。

資料解説…青木俊郎

（大妻女子大学博物館 学芸員）

10 四字書「機敏快活」

大正時代

大妻女子大学博物館蔵

縦二三八・四 横六一・七 cm

本紙縦一八一・七 横四四・八 cm

大妻の教員が学生に指導すべき内容を一六三項目に渡って列記した「訓話要項」（大正十四年へ一九二五）制定、翌年修正）には、「機敏」は「素早く立廻れ。人後に落ちるな。『先んずれば人を制し後（おく）るれば人に制せらる。』とあり、「快活」は「常に快活なれ、陰険は暗黒なり」と解説されている。大妻の学生・生徒には、機敏な動きといきいきとした性格が求められていた。